

いきいき 行田人

真打に昇進し、
ますます輝き続ける落語家に

鈴木 一正さん（38歳・前谷）

落語界で「真打」とは落語家として一本立ちし、一人前になったことを意味します。今月は、来年の5月に春風亭柳城として真打昇進が決まった鈴木一正さんを紹介します。

現在、春風亭柳太の名で活躍し、観客に笑いを提供している鈴木さん。「子どものころは自分が人前で流ちょうに話をして、笑いを取るなんて想像がつかせませんでしたよ」と語るほど、内気でおとなしい少年だったそうです。鈴木さんが伝統芸能である落語に興味を持ち始めたのは、中学3年生の正月。家族で浅草に行き、寄席を見たのがきっかけでした。「落語家がサツと舞台の袖から現れ、スポットライトを浴びながら話をして人々を笑顔にさせ、さっそうと去っていく姿。格好よかったですね」それから鈴木さんは落語に魅了され、高校時代には力セットテープに収録された落語を毎日のように聞くようになりました。大学に入学すると、「落語家になる」という



決意を胸に落語研究会に入部。2カ月後の6月に初舞台を踏んだ鈴木さんは、緊張すると思いきや、自信を持って臨むことができ、会心の出来の落語を披露することができたそうです。1年後に同研究会を退会した後、一人で老人ホームなどの施設を巡り、落語の修業に励み、大学卒業後は指導が厳しいといわれる春風亭小柳枝師匠へ入門。前座として落語家のスタートラインに立った鈴木さんは、その才能をすぐに師匠に認められ、入門して15日という異例のスピードで高座に上がり、次第にラジオ出演など寄席以外の仕事も入るようになりました。

順風満帆に思えた落語家人生でしたが、25歳のころから落語界の独特なしきたりや人間関係に「自分は落語界に合わないのかもしれない」と悩むようになり、それから寄席以外の仕事も入らない状況に陥った時もありました。それでも負けず嫌いな性格の鈴木さんは「アフレコに出れば、落語界を見返すことができる」という思いから、お笑いの養成学校に通ってオーディションを受けたり、独学で脚本を勉強したりと努力を重ね、ついには平成22年度第19回橋田賞新人脚本賞の最終選考にまで残り、落語とは違った才能も発揮したのです。

「今まで荒波のような落語家人生でした。真打は一つの通過点。これからも、はなし家として精進しながら脚本家としてもデビューしたいですね」何事にも貪欲に上を目指す鈴木さん。これからも2つの才能を持ち合わせた異色の落語家として輝き続けます。

私の作品

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

俳句

谷郷 大谷 峯生

咬み合わせ言葉に絡む極暑かな

清水町 新井 圭三

端書に辞世の一句夏見舞

荒木 秋山 二郎

空を見て地を見て梅雨の明けにけり

須加 須加かつ江

色褪せし祭半纏重みあり

前谷 町田 貞子

みんなに元気もらいし八十路かな

城西 新井 恒雄

風鈴の涼しき音色散歩道

城西 新井喜榮子

夕暮の打水涼し路地の風

谷郷 鶴崎 信行

湖の底まで叩く蝉時雨

谷郷 豊田 蓮里

あざつゆは古代蓮葉でフラダンス

谷郷 吉野 六郎

朝もやにぬれて鮮やか蓮の花

前谷 石井マサ子

異国の地なでしこは咲く歓喜して

城南 町田 達男

利根の水けふもおほらか土用入り

桜町 吉岡 守子

花あやめすつきりと立つ雨の庭

持田 伊藤 洋子

短夜や夫のいびきの夜もすがら

持田 丸岡 麟一

ゆらゆらと時代刻みゆく古代蓮

(木島 斗川 監修)



『プリザーブドフラワー』
角倉 和美 (旭町)